斑尾高原の観光開発について

鈴木照男

I

「飯山から12km，ひたすら登りとなっている道を進むと，瞬間パッと視界がひらける。山の中とはとうてい思えない，まるで童話の世界にでも迷いこんでしまったような，斑尾のペンションビレジの北欧風，山小屋風，アーリーアメリカン風，ニューイングランド風……，個性あふれるペンションが，白樺の木木に囲まれてたたずみ，訪れる人々の目を楽しませている。……」斑尾高原開発10周年記念誌に記された紹介文の一節である。(注1)

又この地は，文部省唱歌「故里(ふるさと)」「朧月夜」の作詞者として知られた高野辰之の出身地（飯山市に隣接した豊田村）で，これらの歌も生家のあった斑尾山麓一帯を想いながら作詞されたものと伝えられている。(注2)

斑尾高原は，長野県最北部に近い飯山市西部，長野・新潟両県境に位置し，斑尾山（1,382m）の北東麓に広がる海抜約1,000mの広大な高原地帯で，夏の平均気温22°C，冬は11月下旬より2mを越す深雪地域である。総面積312haの中にスキー場をはじめ，

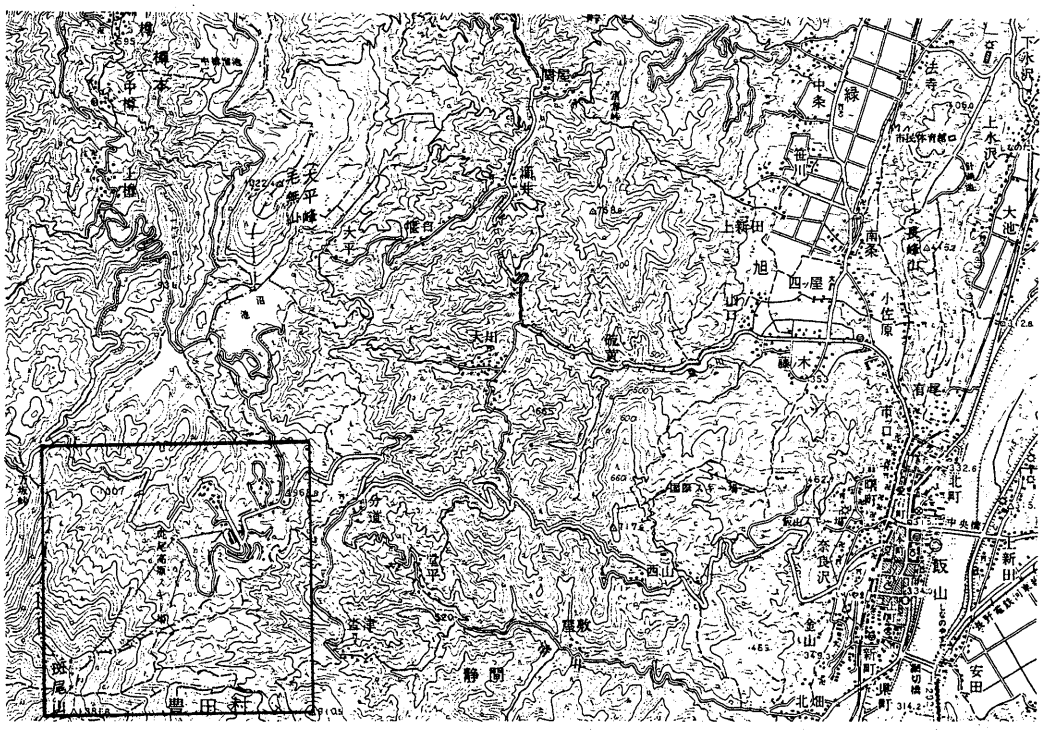


図1　$\frac{1}{2.5万}$地形図　飯山を縮小

ホテル・ペンション・別荘・ショッピングストリートなどが，長野県企業局をはじめ，地元市町村と藤田観光（現斑尾高原開発株式会社）を核として，昭和40年代初期より官民一体の形で人里離れた無人の山地を開発し10数年にして今日の盛況を迎えるに到った。

飯山市内より，斑尾高原に通ずる12kmの取付道路（標高差約650 m）を利用し，路線バスで約45分。東京より夏・冬の両季には，斑尾高原行直行バスが毎日2往復，大阪からも直通バスが運行されている。又夏季には上越新幹線越後湯沢駅前より直通リレーバスも運行され，東京から4時間弱，中京方面からも中央西線・飯山線経由で約5時間で到達できる距離にあり，最近急速に知名度の高くなった高原上のリゾートタウンである。

長野県では，県内観光地を8地区に区分し，開発・整備を計っており，斑尾高原は志賀高原ブロックに属している。(注3)

県内観光地のほとんどが，夏季に観光客入

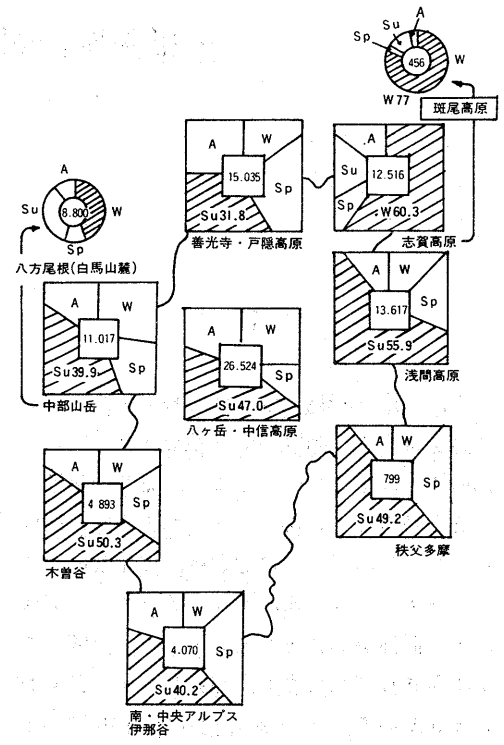
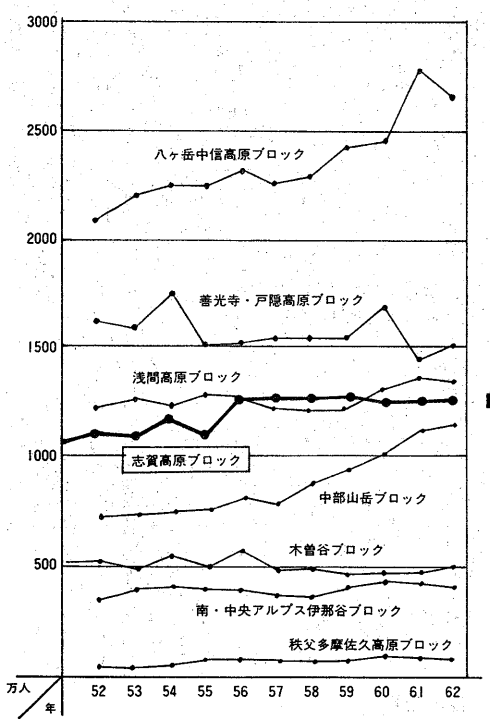


図2　季節別ブロック別観光客入込数（千人）

1月～3月 ―― W
4月～6月 ―― Sp
7月～9月 ―― Su
10月～12月 ―― A
%
（昭和62年度）



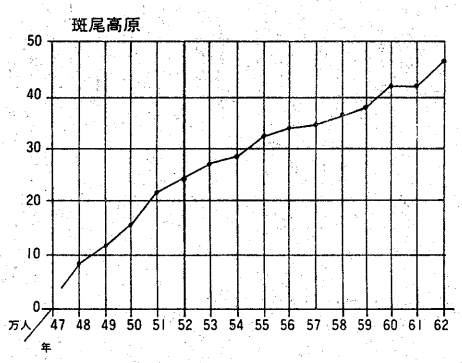


表1　長野県主要観光地ブロック別入込数

込の最高数値を示しているのに対し，志賀高原ブロックは冬季に最高数値が現われている。域内には山内温泉郷（湯田中温泉・渋温泉），南志賀温泉郷（山田牧場・五色温泉），志賀高原，木島平，野沢温泉，戸狩，斑尾高原，その他苗場山・鳥甲山地区，秋山郷などが含まれ，苗場山・鳥甲山，秋山郷など以外はいずれも12月～4月に入込客の最高数値が現われており，雪を資源とした観光地である。この点では県内の中部山岳ブロックの白馬村（八方尾根・白馬山麓）などに一脈通ずるものがある。今回は，斑尾高原の開発過程と現況について調査をすすめた。

Ⅱ

飯山市を中心とした地域は，長野県内では最高の豪雪地域で，飯山市も昭和40年頃より高度成長を遂げた日本経済の下積的存在として，深刻な過疎化現象の影響下にあった。特に豪雪は地域経済に大きな財政的圧迫としてのしかかり，地域発展の大きな阻害要因となり，立ち直りをも困難にしていた。この頃から過疎対策の一環として，斑尾山麓開発の実現化についての具体的計画が急ピッチで進展しはじめた。長野県も豊富な観光資源を活用し，過疎に対応することが急務と考えていた時期とも合致し，開発に対するアプローチは，行政側から始動しはじめた。(注4)

先ず長野・新潟両県を結ぶ林道（沼・万坂線）の改修を手始じめに，昭和40年には斑尾高原開発林道（沼・万坂線）期成同盟が結成された。又観光開発のためには，土地提供の形での地域協力が必要であるが，これに対して斑尾高原開発の場合は，41年6月に飯山商工会が母体となり，飯山開発準備会が結成され，住民への理解と協力を求めると共に，関係機関に対しても積極的行動が開始された。その結果，同年9月には長野県企業局公営企業管理担当者の現地視察もあり，斑尾山麓の雄大な自然が再認識され「菅平方式」による開発計画が採用されることとなった。42年には，地域住民と飯山市の協力により斑尾高原観光開発促進期成同盟会が発足し，「菅平方式」による開発計画が市議会の承認を得るに到った。「菅平方式」とは，先ず住民の所有地を無償で県に提供し，この土地を県企業局が造成・分譲し，その利益を土地提供者に還元する方式で，地主の理解と協力が必要であり，又地区によっては共有地等もあり，地区住民全体の同意が必要な場合もあった。然し同盟会の熱意と住民の理解・協力の結果，提供を受けた土地158.7haが43年3月に，飯山市議会の決議を経て，県企業局に提供された。

斑尾山は，長野・新潟両県境にまたがり，開発されるまでは前記した如く，ほとんど人跡未踏の場所であったが，長野県側としては，「夏の野尻湖，冬の飯山・斑尾」を有機的に結合させ，地域住民の経済的効果を増進させる計画で，雄大な自然を保健・休養地として開発する必要上，新潟県中頸城郡妙高村の理解・協力を得る必要があった。一方新潟県側も，既に以前から長野県との連携下に斑尾山麓に県民家族村の建設や道路整備事業推進の計画があり，今後のスキー場・ホテル・ペンション・別荘などの宿泊施設やテニスコート等の整備拡充計画もあったため，長野・新潟両県では行政区を乗り越えて両県一体化による事業推進の必要性が認められ，妙高村の土地96haが県境を越え長野県に提供されたのは，飯山市が県に用地提供の4年後の47年4月であった。更に長野県側の信濃町分用地57.3haの提供についての同意も得られるに到った。溯のぼって43年8月には，取付道路の起工式が挙行された。(注5)

斑尾高原の冬は極めて苛酷で，山頂付近の積雪は3mを越える程であるが，藤田観光はこの地の特性に着目し，綿密な調査を経て，

昭和45年にスキー場・ホテル開設の申請を提出し，同年認可された。同時に斑尾高原開発道路（取付道路）10.6kmも完成し，高原開発も本格化していった。

以上述べた如く，現在の国際的リゾートタウン斑尾高原は，県企業局と民間企業の調和の下に計画的に開発が進められ，47年12月にはスキー場及び斑尾高原ホテル（収容数400人）も完成した。又7軒のペンションも同時期に営業を開始している。これはリゾートタウン斑尾の曙光でもあった。

しかし現在の既開発分は，当初計画の50%に過ぎないが，通年型多目的リゾートタウンとしての可能性を密め期待がかけられており，その発展ぶりも急ピッチであった。例えば県内で入込客の多い主要観光地の昭和52年度と62年度の観光客入込数と消費額の推移をみると表2の如くである。(注6)

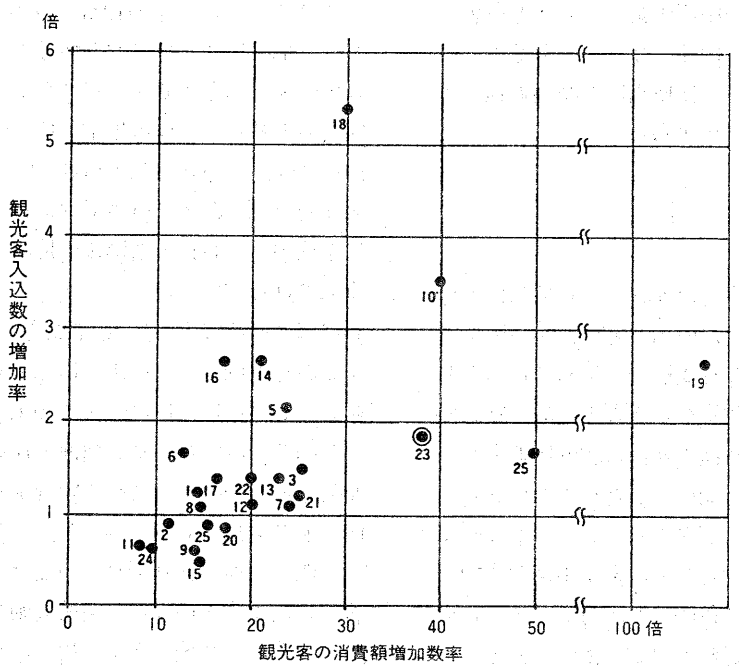


表2 主要観光地の昭和52年度と62年度の観光客入込数と消費額の推移

1.軽井沢	6.蓼科高原	11.白樺湖	16.別所温	21.南志賀	26.戸倉温
2.善光寺	7.蓼科牧場	12.東白樺湖	17.野沢温	22.志賀高原	
3.上諏訪	8.戸穂高原	13.黒部ダム	18.白馬山麓	23.斑尾高原	
4.霧が峰	9.上山田温	14.菅平高原	19.富士見高原	24.飯網高原	
5.八方尾根	10.上高地	15.懐古園	20.浅間温	25.乗鞍高原	

Ⅲ

現在斑尾高原には，ホテル12，ペンション・ロッヂ等93，保養所・貸別荘・マンション等6，店舗29，その他の施設6などが集中し，最近流行のペンションビレジが形成されている。一般にペンションビレジの形成過程については，開発の経緯から幾つかのタイプに分類できる。例えば民間デベロッパーとオルガナイザーが提携し開発したもの，又はオルガナイザー独自の開発によるものなどは一般的な例と思われるが，斑尾高原の場合は，地方公共団体と，民間デベロッパーが提携してオルガナイザーとしての役割をはたし，豊かな経験を生かし，的確な先見性が，一般のホテル・ペンション等の経営者にも受け入れられ，地域全体の協力，互助的結合が，この斑尾発

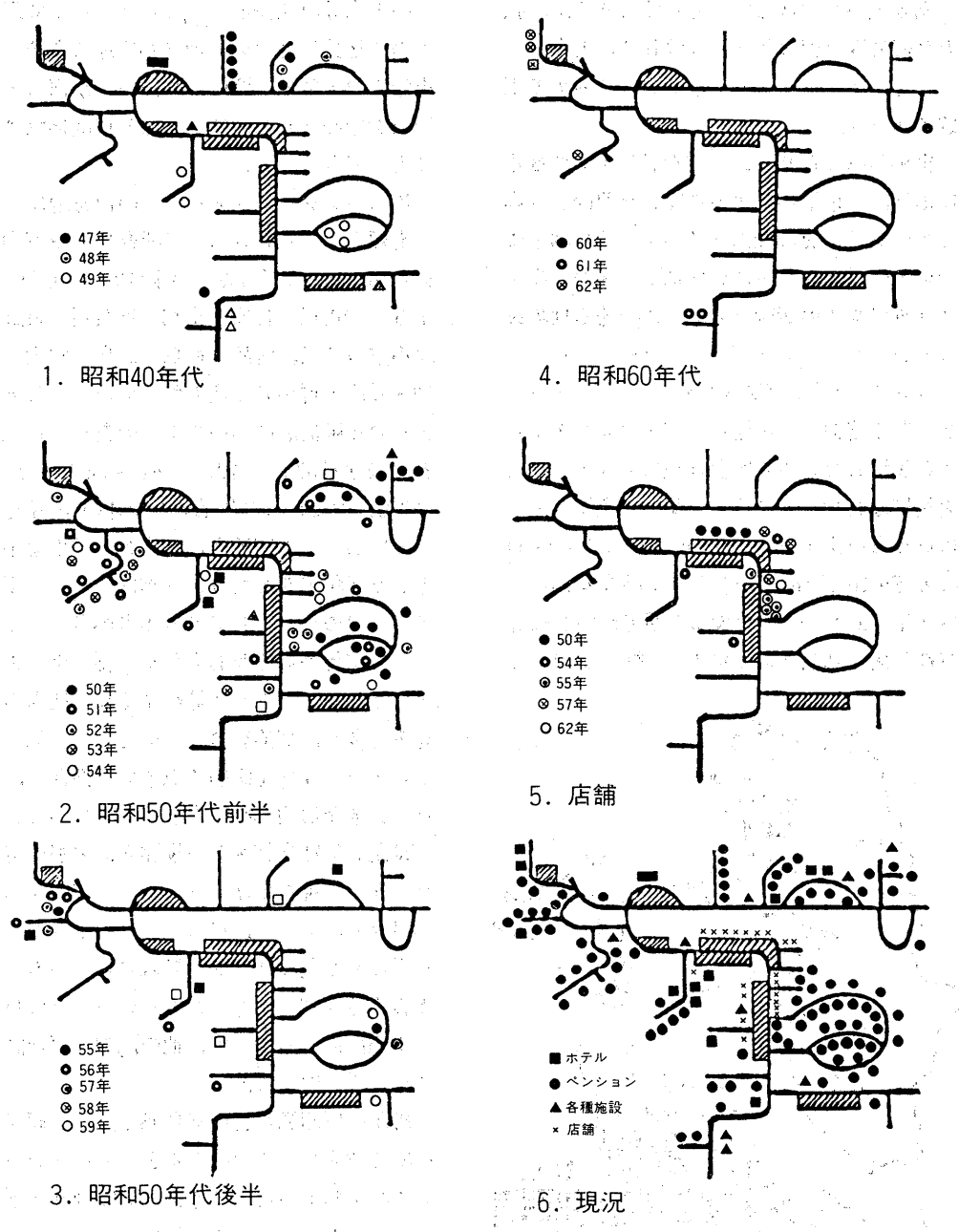


図3　ホテル・ペンション・各種施設・店舗の建築年代とその現状

展の強力な原動力となっていたことは云うまでもない。

現在はペンションブームとも云われ，長野県内にも白馬山麓一帯，軽井沢，菅平，富士見高原，蓼科高原，白樺高原，霧が峯，諏訪郡原村，その他黒姫・妙高高原，野尻湖など典型的ペンションビレジが形成されていて，更に増加の傾向にあり，これらも地域の特性

を充分生かし立地しているわけであるが，強力な観光客誘引の因子がなければ，現在のペンションブームをリードすることは極めて困難であろう。

斑尾高原の自然は，四季を通し極めて変化に富み，他地域を圧するに充分な要因を具備しているが，更に強力なイベント等の誘致についての必要性から，57年にジャズの本場アメリカで№1の伝統とスケールを誇る世界最大のジャズイベント〝ニューポート ジャズフェステバル〟と〝アメリカンビア バドワイザー〟の協力で，斑尾ジャズ・フェスティバルが実現した。この実現は極めてユニークで大規模な企画として注目を集め，斑尾の8月に於ける恒例イベント「Budweiser Newport Jazz Festival in 斑尾」として脚光をあび，本年第7回を迎え，今後にも期待が寄せられ，特に斑尾の知名度高揚に大きく役立っている。

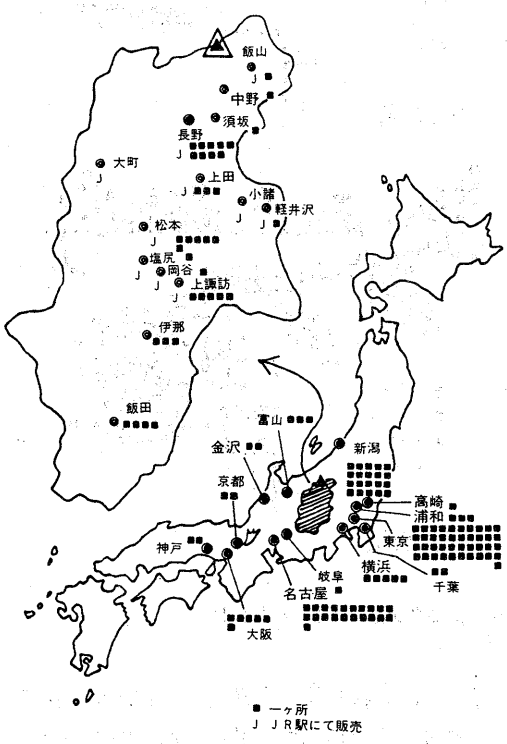


図4 Budweiser Newport Jazz Festival in 斑尾'87の前売チケット販売所の分布（長野県内及び各都府県）

この前売券の発売地(注7)から，夏季に斑尾への入込観光客の後背地（中部地方全域，関東地方の大部分，関西の大阪市・京都市・神戸市を中心とした地域）をある程度推測することもできる(図4)。

次にペンション・オーナーの出身地についても類似点がみられる。（調査した52軒中）東京出身者19人(37%)，大阪10人(19%)，埼玉5人(10%)，兵庫・京都・神奈川・長野・北海道各2名，宮崎・徳島・広島・岡山・愛知・富山・群馬各1名となっている。又オーナーの年齢構成についても，調査した73人中34～43才が37名（51%）・44～52才が27名（37%）でこれらの年齢層で全体の88%を占めている。一方宿泊者の大半が大学生を中心とした青年男女であり，冬季はスキー，夏はテニス等の合宿としての利用者が多く，これらとの年齢差も比較的少なく，特にオーナー中にはスキー，テニス等にすぐれた技術の所有者も多く，宿泊客のコーチとして，又コミュニケーションを深める点でも好都合で，これが大きな宿泊客吸引力ともなっている。

斑尾高原は当初スキー場開発に主眼が置かれてきた。現在では7コース，17基のリフトが設けられており，更にサンパテイックスキー場にも2基のリフトが設置されている。観光客入込も12～4月のスキーシーズンに集中する傾向にあることは，他の志賀高原地区のスキー場と同一である。

斑尾高原開発当初の昭和48年度入込観光客は84,873人で，そのほとんどがスキーシーズンに集中していた。52年には245,800人と入込数も急増し，このうち約81%（200,000人）が12～4月のスキーシーズンに集中し，スキーリゾートの性格が強く現われている。(注8)斑尾としては当然オールシーズン型リゾート地域への構想があり，夏のスポーツ合宿に強い期待をかけていた。48年には4面しかなかったテニスコートも，この頃よりのテニスブ

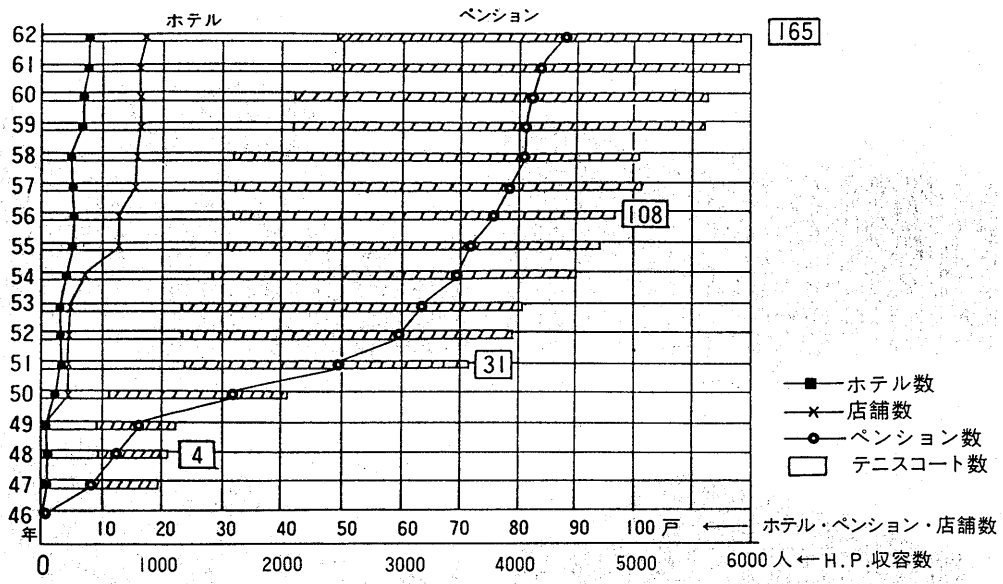


表3　ホテル・ペンション・店舗・テニスコート及び宿泊客収容数の増加状況

ームにのり，このファッション性が若い女性の心理と結合し，スポーツはテニス，宿泊はペンションのブームと共に，テニスコートは宿泊施設の付帯設備として必要不可欠のものとなり，51年度には総数31面，56年度には108面，更に62年度にはハード129・クレー36，合計165面のテニスコートが完成している。(注9)

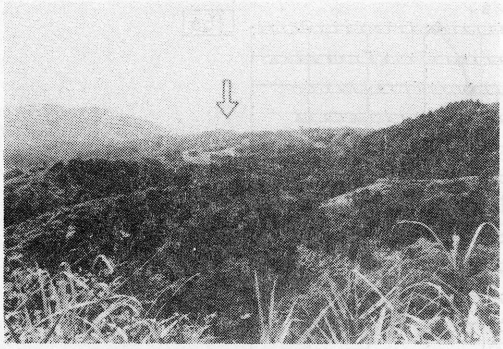
入込客数も458,000人に増加し(表1参考)，スキーシーズンには入込数の77%に当る352,000人，5～11月のオフシーズンにも23%に当る103,800人が訪れるまでになった。以上の如く，斑尾高原に於けるテニスコートの位置づけは，夏季の各種イベントと共に，オフシーズンの誘客に対し極めて有効な役割をはたしてきた。

Ⅳ

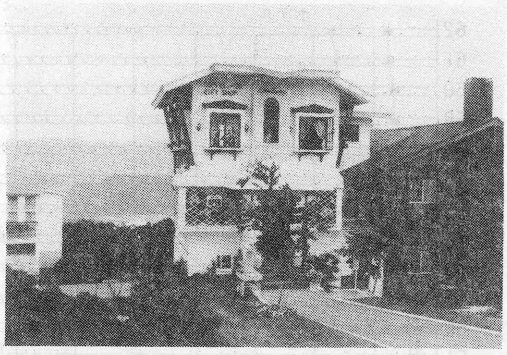
オイルショック以降，高度経済成長社会から，安定成長社会の時代に入り，余暇及びレジャーに対する国民の関心は急速に進展し，最近では観光行動の目的や形態等にも変動が認められ，「総合保養地域整備法」所謂「リゾート法」の施行により，観光の意味についても再検討の段階にさしかかりつつあるといえよう。

これまで斑尾高原の地域変容のプロセスの一端を述べてきたわけであるが，長野県内に於ても，菅平方式による開発は，この斑尾高原，菅平高原の他に諏訪郡原村があげられる。

原村のペンションビレジも過疎対策及び，観光開発のため企画され，村役場とP. S. D. (Pension Sistem Development) の協力により実現した。しかし当初の計画では，会社の保養施設及び別荘地分譲として開発が計画されていたが，オイルショックを契機に，大きく方向転換せざるを得なくなり，ペンション用地としての分譲に切り換え，49年4月に第1号ペンションがオープンして以来，現在は第1，第2ビレジ合せて91棟のペンションが完成している。しかしテニスコート，ゴルフ場，プール，レストラン等の付帯施設の開発・建設は現時点でも，青写真の如くには進展せず，利益配分や施設の経営・管理面で種々の思惑がからみ，原村の場合は完全な成功例

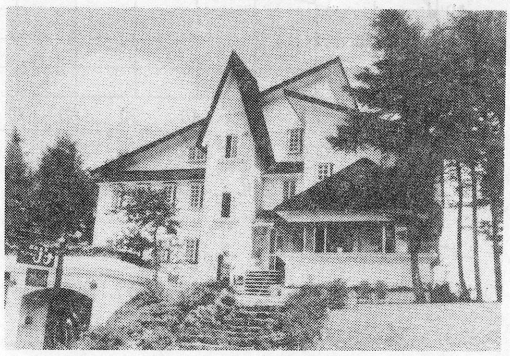


斑尾高原遠望

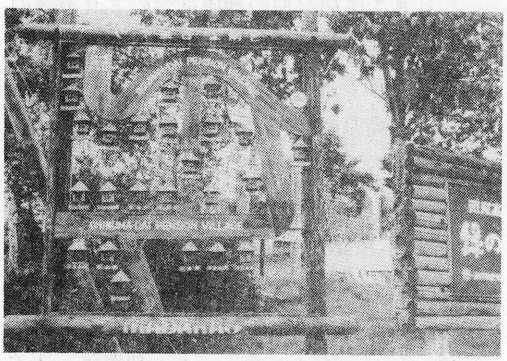


ペンション・レストラン

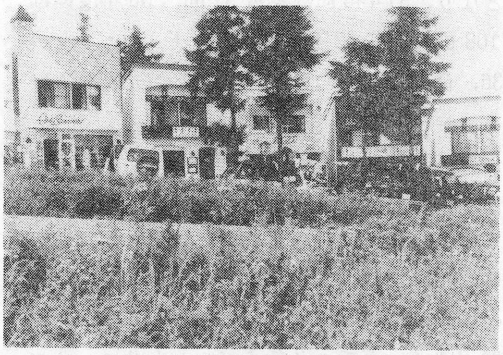
斑尾高原ホテル



ペンション



ペンション村案内板



ショッピングストリートの一部

とは云えない面がある。(注10)

これに対し斑尾高原の場合は，地方公共団体及び，民間デベロッパーが提携し，オルガナイザーとして開発が進められ，特に民間デベロッパーとしての斑尾高原開発株式会社の強力なバックボーンと，過去の豊富な経験的実績をフルに活用し，極めて効果的な各種アイデアの展開により，現在の盛況を迎えたのであるが，更に今後の第二次開発計画として，斑尾山北斜面にスキー場を拡張しリフト5基を設置することにより，面積上では現在の2倍規模のスキー場となり，ダウンヒルコースが追加されるのみでなく，クロスカントリーや，ルージュボブスレーなど全国でも例の少ないリゾートスキー場に変貌させる計画がある。(注11) 更に第三次計画では，大企業の保

養施設及び学校寮の誘致も考えられており(現在，阪急電鉄保養所，久保田鉄工保養所その他数施設が開設されている)，斑尾西麓の信濃町地籍の開発（スキー場・ゴルフ場）も計画されていて，工事も推進されつつある。(注11)

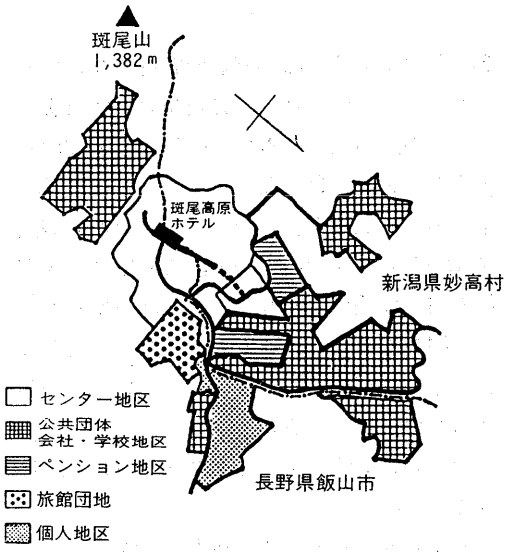


図5　長野県企業局・長野県地域開発公団の開発分譲地

然し現在まだ当初予定した開発計画の約半分が開発されたところで，未開発地域の土地提供者に利益を還元しえて，はじめて広域観光地の構想が実現されるわけであり，今後の発展に期待するところ大である。

今回の調査に対しては長野県商工部観光課主事丸山留里子，斑尾高原開発株式会社課長田渕義昌，信州飯山市観光案内所（在東京）所長小野塚岩雄，飯山市役所商工観光課青木彰の諸氏に大変お世話になりました深謝いたします。

注

注1）斑尾高原開発10周年記念誌：斑尾高原開発10周年記念事業実行委員会

注2）飯山線の旅：飯山線観光連盟

注3）昭和62年度観光地利用者統計調査結果：長野県商工部観光課

注4）前掲 注1）

注5）前掲 注1）及び市制30いいやま<年表>（市制30周年記念誌）：飯山市

注6）前掲 注3）及び同52年版：長野県商工部観光課

注7）Budweiser Newport Jazz Festival in 斑尾 '87 パンフレット

注8）飯山市観光課資料

注9）斑尾パンフレット：斑尾高原観光協会

注10）レジャー産業資料（スキーリゾート，マネージメントガイド 1988)：総合ユニコム株式会社

注11）斑尾高原（長野県が開発した信州の別荘地）パンフレット：長野県企業局・長野県地域開発公団